

思春期女子における身体成熟と身体への意識に関する研究

近 藤 三弥子

I 問題と目的

思春期における急激な身体変化は、青年の精神生活に大きな影響を及ぼすと言われている。とりわけ、女子の初潮は、その発現が突然であることから、青年の精神生活にとって大きな衝撃となると考えられている。

思春期の女子の精神的発達に関しては、Kestenberg, J. S. (1967)ら精神分析学者に詳しい。彼女らによると、思春期頃の女子は、第二次性徴の開始前後に心理的混乱の時期を迎えるという。性腺刺激ホルモンが急増し、身体内部の変化が生じると、前性器期の衝動が復活し少女を退行へと促す。それに対抗するために少女はしばしば「お転婆」になる。一方乳房などの身体外部の可視的变化も生じはじめ、少女の身体境界を脅かす。少女は退行と発達との狭間に追いやられるが、やがてこの「拡散」も初潮を契機として「再統合」を迎えるという。

しかし、身体成熟とその心理的影響に関する実証的研究は、数が少ない上、研究結果にあまり一致が見られない。また方法論的には、身体成熟の変数としてひとつの指標——中心的には初潮——を取り上げるものが多いが、第二次性徴による身体変化にはいくつかの側面があり、それらが同時に、また無関連に生起するわけではない。さらに、心理的指標については、研究者により様々な変数が取り扱われているが、身体の変化に直面した者が、自己の身体をどのように意識しているのかといった側面に関して、多面的に検討している研究は見当たらない。

本研究では、思春期における身体変化による心理的影響を、女子に限って検討するが、以上の問題点をふまえて、その関連を時間的要因も加えて力動的に考察する。

<目的1> 思春期女子の、身体への意識の構造を検討する。ここで「身体への意識」とは、個人が自己の身体に対して抱く感情・態度・評価をいい、さらに自己の身体の変化に対して抱く感情・態度・評価といった時間的変化の視点をも含む包括的概念とする。

<目的2> 思春期女子において、第二次性徴の発現を中心とする身体成熟の段階による身体への意識の変化を、横断的研究法によって、検討する。身体成熟の指標としては、乳房の発達の程度と初潮の有無を取り上げるが、それらは順次発現すると考えられるので、①初潮を迎えておらず、乳房の発達も認められない者（未潮・乳房未

発達群）、②初潮を迎えていないが、乳房の発達は認められる者（未潮・乳房発達群）、③初潮を迎え、乳房の発達も認められる者（既潮・乳房発達群）、の3群が得られると予測できる。これらの群において、未潮・乳房発達群が最も身体への意識が否定的であり、既潮・乳房発達群が最も肯定的である、という仮説1を検証する。
<目的3> 身体への意識は、同年齢集団の様相によって左右されると考えられる。同年齢集団において、身体成熟の程度が逸脱的である者は、身体への意識が否定的である、という仮説2に関しても検討を加える。

II 方法

自由記述による予備調査から得られたプロトコルを、言及された身体の部位、機能ごとに分類し、その中から<身体の外観><乳房><初潮・月経>の3領域に関するものを抽出し、一文にひとつの意味内容となるよう分割した。予備調査は小学6年生39名、中学1年生43名、中学2年生36名に実施した。それに著者が若干数の項目を補い、144項目とした。さらに著者を含む大学院生、院研究生5名からなる小集団討議によって<身体の外観>領域では14項目、<乳房>領域では17項目、<初潮・月経>領域では、既潮者用に23項目、未潮者用として17項目を選定した。それらを、各領域ごとにランダムに並べ、質問紙を作成した。身体成熟度については、初潮の有無と時期、乳房の発達の程度を尋ねたが、後者に関しては、福井(1980)による4段階の発達モデルを参考にして著者が作図したものに、○を付けるよう指示した。

有効調査対象は、小学5年生126名、6年生124名、中学1年生130名、2年生147名、3年生170名である。

III 結果と考察

1 身体への意識の構造

身体への意識に関する項目を、各領域ごとに、学年別に因子分析（主成分分解・バリマックス回転）を行なった。ただし初潮・月経領域では、未潮者と既潮者とで項目が異なるため、別々に分析した。また人数が少ないため、未潮者は中学生全体で、既潮者では小学生全体で分析した。因子数は因子の解釈可能性から検討し決定した。その結果、身体の外観領域では小5で4因子、小6で5因子、中1で4因子、中2で5因子、中3で4因子・乳房領域では各学年で4因子、既潮者の初潮・月経領域で

は各学年で5因子、未潮者の初潮・月経領域では各学年で4因子が得られた。各学年の因子構造を比較検討した。

さらに、各領域で最も因子構造が解釈上わかりやすい学年を基準とし、尺度を儲けた。身体の外観領域では中1を基準とし、変化の受容、関心、他者意識尺度を得た。乳房領域では中1を基準とし、変化の受容、一般的態度、関心、拒否感尺度を得た。既潮者の初潮・月経領域では中1を基準とし、一般的態度、受容、こだわり、拒否感、初潮時の不安尺度を得た。未潮者の初潮・月経領域では小6を基準とし、否定的感情、期待感、拒否感、不安感尺度を得た。これらについて、領域内の尺度間相関係数と、領域間の尺度間相関係数を求め、検討した。

身体の外観領域では、小5では意識が未分化であり、小6では分化するが、両価の特徴を示す。それが中1では統合される傾向が見られた。さらに、中2ではいったん意識の低下が認められ、中3では他者意識が重要性を持ち、身体の変化への意識がそれまでとは違う様になることが見られた。他の2領域においても、同じ傾向が見られた。これは、未分化から分化へ、両価的意識からその統合へ、そして複雑化へ、という発達の様相として捉えられる。さらに、身体に対する一般的な態度と、自己の実感との分化も生じている。身体の変化が現実にはそれほど顕著に生じていない時期には、社会的通念として存在するようなステレオタイプな態度と、自己の意識とは当然未分化である。それが、実際に身体の変化を経験すると、ステレオタイプな態度とは必ずしも一致しない自己の意識が芽生える。そしていくつかの意識が入り混じった時期を経て、身体変化が一応の終焉を迎える頃になると、意識は統合され、矛盾のないものとなると考えられる。

以上のように思春期の成熟課程は、直線的なものではなく、肯定と否定を繰り返しながら展開していくことが示唆された。そこで、小5は未分化の段階、小6は両価的段階、中1は統合の段階、中2は否定的段階、中3は再統合・複雑化の段階と呼ぶことができる。

2 身体への意識と、身体成熟度との関連について

乳房の発達が生じているものを乳房未発達群、3・4である者を乳房発達群としたところ、未潮・乳房未発達群、未潮・乳房発達群、既潮・乳房未発達群が、小5でそれぞれ31名、82名、10名、小6で23名、65名、36名、中1で5名、24名、99名、中2で、0、10名、130名、中3で0、1名、157名であった。また既潮・乳房未発達者が、中1で1名、中2で4名、中3で9名認められた。

1で得た各尺度について、学年差、身体成熟度による差、学年ごとの身体成熟度による差、身体成熟度ごとの学年差を、分散分析によって検討した。ただし、初潮・月経領域では、身体成熟度ごとの学年差の検討以外では、

既潮者未潮者の共通の質問項目の合計点で分析した。

学年差は、身体の外観領域の他者意識尺度以外の全ての尺度で認められた。全体的に小6、中2で下がるW型を示しながら、上昇する傾向、つまり肯定的になる傾向が見られた。ただし乳房領域の関心尺度では、W型を示しながら平均値は下降する傾向が見られた。また、他者意識尺度では、有意差は認められないが、次第に下降する傾向、つまり他者意識が高まる傾向が認められた。身体成熟度による差は、身体の外観領域、初潮・月経領域の全尺度と、乳房領域の関心尺度において認められた。身体の外観領域の変化の受容尺度および初潮・月経領域では、既潮・乳房発達群が最も平均値が高い、つまり受容的であった。しかし、未潮・乳房発達群が否定的である傾向は認められなかった。また、既潮・乳房発達群が最も身体の外観への関心・他者意識が強かった。乳房への関心は、未潮・乳房発達群が最も高かった。この群ではまさに乳房の発達が生じており、関心が強いと考えられる。

各学年で、身体成熟度の分布が異なるため、以上の差が学年によるのか身体成熟度によるのかは明らかではない。そこで学年ごとの身体成熟度による差の分析をしたところ、小5では、乳房の変化の受容、一般的態度、拒否感において、既潮・乳房発達群が最も否定的であったが、他学年(中3は除く)では有意差は認められなかった。また、身体成熟度ごとの学年差も検討したが、とりわけ既潮・乳房発達群では、ほぼ学年差と同様の傾向が認められた。つまり本研究では、身体への意識への身体成熟度による影響は強く見られず、むしろ学年差が大きく認められた。従って仮説1は支持されなかった。この学年差でも、肯定―否定―統合の過程がうかがわれる。

一方、小5の既潮・乳房発達群は、否定的な身体への意識を持っており、部分的に身体成熟度の影響が認められた。身体成熟度と身体への意識との関連が、若干示唆された。小5の既潮・乳房発達群は逸脱群といえるが、従って仮説2を部分的に支持したといえる。早熟であることの心理的影響が、その後に持続するかどうかを検討するために、中3において、初潮の時期による群分けを行なって分散分析を行なったところ、むしろ早熟の方が身体への意識が肯定的であった。従って、早熟であることの影響は長くは持続しないことが示唆された。

文 献

福井泰之 1980 青年期の不安と成長―自己実現への道―有斐閣新書

Kestenberg, J. S. 1967 Phases of adolescence, Parts I and II. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 6 (3・4), 426-463, 577-611.